令和 5 年 4 月 1 日

令和4年度共同研究講座活動実績報告書

共同研究講座名：集学的身体活動賦活法開発講座

所　属　長　：　三　上　靖　夫

1　共同研究講座の目的

少子高齢化が進む中、疾病構造が変化するとともに必要とされる医療の内容が移り変わってきた。そのため従来とは異なる視点で、疾病・病態・障害を捉えて対処法を編み出す必要に迫られている。重要な視点のひとつが「活動」である。

ヒトの営みの基本である活動に、何らかの原因で支障が出れば、ヒトは自立した文化的な生活を送ることができなくなる。活動のレベルには、日常での活動、家庭での活動、社会での活動などがある。これらの身体活動に関して、賦活法を集学的に開発研究することを目的とする。

2　報告年度に係る取組状況

本講座設立時から継続している関節炎・関節症患者を対象とした研究では、身体活動の賦活がQOLの向上につながることを明らかにし、国際誌で公表した。現在は、対象疾患の拡大とともに、より客観的に身体活動を解析するため，3軸加速度計を用いてデータ収集を行なっている。また、比較対象となる健常高齢者の身体活動は、京丹後市における健診を通して、データ収集を継続している。

昨年度から開始した本学附属病院他診療科、および府内リハビリテーション関連施設との集学的治療に関する共同研究では、プロトコルの作成が完了し、それぞれデータ収集を開始した。成果の一部は、国内主要学会および国際誌で公表した。これら研究計画の一部は、新たに公募の競争的資金を獲得できた。

新規の取組では、十分な運動を行えない在宅生活を送る患者を想定したリハビリテーション治療プログラムを確立するため、多施設共同研究としてプロトコルを立案し、倫理審査員会の承認を受けた。引き続き“活動を賦活”する意義を通して、本邦における健康長寿の実現に向けた提言を行なっていく。

3　報告年度における著書、論文、学会発表、講演、研究助成等の実績

［Ⅰ］著書

1. 三上靖夫，佐浦隆一：Ⅰ総論　3. 運動疾患・外傷のリハビリテーション診断・治療・支援．運動器疾患・外傷のリハビリテーション医学・医療テキスト（久保俊一・津田英一）．57-81．医学書院．2022.

2. 三上靖夫：Ⅱ各論　1. 脊椎・脊髄．運動器疾患・外傷のリハビリテーション医学・医療テキスト（久保俊一・津田英一）．85-140．医学書院．2022.

3. 大橋鈴世：Ⅱ各論　7. 足．運動器疾患・外傷のリハビリテーション医学・医療テキスト（久保俊一・津田英一）．307-334．医学書院．2022.

4. 三上靖夫：Ⅱ各論　8. 切断．運動器疾患・外傷のリハビリテーション医学・医療テキスト（久保俊一・津田英一）．335-355．医学書院．2022.

5. 沢田光思郎：Ⅰ総論　7. 地域包括ケアシステム．耳鼻咽喉科頭頸部外科領域のリハビリテーション医学・医療テキスト（久保俊一・村上信五）．36-37．医学書院．2022.

6. 大橋鈴世：Ⅷ各種疾患のリハビリテーション診療における栄養管理　3. 大腿骨近位部骨折．リハビリテーション医学・医療における栄養管理テキスト（久保俊一・吉村芳弘）．147-151．医学書院．2022.

7. 白石裕一，三上靖夫：Ⅱ内部障害のリハビリテーション医学・医療　1-3. 虚血性心疾患．内部障害のリハビリテーション医学・医療テキスト（久保俊一・海老原覚）．76-81．医学書院．2022.

8. 沢田光思郎：リハビリナース2002年秋季増刊．回復期リハ病棟の疾患と症状まるわかり BOOK（勝谷将史，沢田光思郎）．メディカ出版．2022.

［Ⅱ］論文

1. Hishikawa N, Sawada K, Shono S, Sakurai M, Yokozeki M, Maeda H, Ohashi S, Ueshima K, Mikami Y: Accurate diagnosis of sarcopenia without using a body composition analyzer in a convalescent rehabilitation ward. Jpn J Compr Rehabil Sci 14, 26-32, 2023.

2. Hishikawa N, Toyama S, Shimahara N, Taira K, Kawasaki T, Ohashi S, Sawada K, Mikami Y: A home-based low-intensity resistance exercise programme with

supervision for secondary sarcopenia in a patient with established rheumatoid arthritis: A case report. Modern Rheumatol Case Rep, 2023 (Epub ahead of print).

3. Hishikawa N, Toyama S, Sawada K, Kawasaki T, Ohashi S, Ikoma K, Tokunaga D, Mikami Y: Effect of foot orthosis treatment on quality of life in secondary sarcopenia patients with rheumatoid arthritis-related foot impairment. Prog Rehabil Med 7, 20220047, 2022.

4. Imai K, Onishi T, Sawada K: Dynamic Lower-Limb Alignment Focusing on Gait Stability. OJTR 10, 179-188, 2022.

5. 菱川法和，沢田光思郎，三上靖夫: 【疾患別理学療法における装具療法の役割(第3回)】脳卒中片麻痺患者の装具療法：下肢装具Ⅰ. 理学療法 39, 555-561, 2022.

6. 菱川法和，大橋鈴世，三上靖夫: 【がん悪液質におけるチーム医療】がん悪液質における運動療法. 京府医大誌 131, 831-839, 2022.

［Ⅲ］学会発表

＜特別講演等＞

1. 三上靖夫: リハビリテーション医学・医療の進歩と近未来. 第337回京都整形外科医会学術集会，京都. 2022.2.26.

2. 三上靖夫: リハビリテーション医学・医療の現在と未来. 第35回日本臨床整形外科医会学術集会，徳島. 2022.2.26.

＜一般講演＞

1. 菱川法和，遠山将吾，西郊靖子，徳永大作，三上靖夫: 関節リウマチに続発するサルコペニアと日常生活における活動強度別身体活動の関連性. 第67回日本リウマチ学会総会・学術集会，横浜. 2022.4.26.

2. 菱川法和，遠山将吾，沢田光思郎，河崎　敬，大橋鈴世，徳永大作，三上靖夫: 関節リウマチ患者の部位別骨格筋量と身体活動の関連. 第59回日本リハビリテーション医学会学術集会，横浜. 2022.6.24.

3. 根本 玲，伊藤倫之，小山　瞳，坂田ゆき，三上靖夫: 回復期リハビリテーション病棟入院中の脳血管障害患者のアクチグラフを用いた身体活動量の変化. 第59回日本

リハビリテーション医学会学術集会．横浜，2022.6.24.

4. 櫻井桃子，菱川法和，奥田草太，横関恵美，沢田光思郎，前田博士：回復期リハビリテーション病棟に入院した脳血管疾患患者におけるサルコペニアとADL帰結との関連の検討．第59回日本リハビリテーション医学会学術集会．横浜，2022.6.24.

5. 菱川法和，遠山将吾，沢田光思郎，河崎　敬，大橋鈴世，徳永大作，三上靖夫：関節リウマチ患者のサルコペニア治療における座位活動からの置き換えの実現可能性．第10回日本運動器理学療法学術大会，WEB．2022.9.24-25.

6. 新庄浩成，大橋鈴世，沢田光思郎，久保元則，木村洋輝，的場聖明，三上靖夫：京丹後市地域在住高齢者の骨密度と身体活動の関係とサルコペニアが与える影響．第6回日本リハビリテーション医学会秋季学術集会，岡山．2022.11.6.

［Ⅳ］研究助成

1. 三上靖夫：高齢者の活動が健康寿命に与える影響 −京丹後長寿コホート研究から−．科学研究費助成事業 基盤研究（C）．2022-2024.

2. 菱川法和：回復期リハビリテーション病棟退院後の身体活動と身体組成にあたえる関連因子の解明 −多施設縦断研究−．公益財団法人大阪ガスグループ福祉財団．2022.

［Ⅴ］その他

1. 沢田光思郎：きょうのセカンドオピニオン「Q．ポリオの進行が心配」．毎日新聞．2022.3.30.

2. 沢田光思郎：脳卒中とリハビリテーション科．KYOTO MEDICAL TALK．2022.4.29.

※欄内におさまらない場合は枠を広げて記入のこと。

※大学ホームページ等において公表することとなるので、秘密情報については記載しないこと。